

【教員寄稿】

チャレンジの25年

Mauro Neves

1994年に嘱託講師としてポルトガル語学科に着任して以来、私の教員・研究者としての人生はチャレンジの連続だった。これは決して大げさなことではないと、この文章を書きながら改めて思った。

最初は2年間契約の嘱託講師であったため、教えることと研究者として自分の道を切り開くことに集中し試みた。ほぼ毎日、授業のない時間は恵まれた上智大学の図書館で資料を探したり読んだりして時間を過ごした。管理職としての仕事に時間を取られない時期があったと、今懐かしく思う。

1996年4月から専任講師になると聞いた時は嬉しかった。しかしここからはさらなるチャレンジが増えた。日本の大学システムがまだよくわからないまま、広報委員に選出された。インターネットがまだ普及していない時代であり、学科を宣伝する文章を書くことがとても多かった。研究に時間を費やしたい私にとって、時間の整理をどのようにすればいいかを考えることに力を注ぐ、初のチャレンジでもあった。

1998年2月に、堀坂先生の推薦を受けてカリフォルニア大学サンディエゴ校で行われた国際共同若手研究者プログラムに日本代表として参加できたことは、研究者として大きなチャレンジであった。そこで収めた成功は私にとって日本そして母国ブラジルだけではなく、国際的に研究者として活躍できるスタートでもあった。

大学においては様々なチャレンジが続いた。ファドのサークルや劇団を設立したり、学科に入ったときに専門としていた文学から、当時私が上智大学で作った授業以外に東京大学にしか存在しなかったポップカルチャー研究に広がり、様々な管理職を務めたりもした。

2003年に最初のサバティカルをいただき、研究者として再びチャレンジしようと思った。そのため、テキサス大学オースティン校で3ヶ月を過ごしながら資料を集めた。その後、カナダ、メキシコおよびコスタリカにも行き、調査をした。そしてブラジルで3ヶ月を過ごした後、リスボンで大物のファド歌手の一人の下でファド歌手の修行を受けながら、4ヶ月の間ファドに関する様々な資料を集めた。サバティカル最後の1ヶ月はシンガポール国立大学で研究および講演を行いながら過ごした。

大学に戻った2004年から再び様々なチャレンジがあった。イベロアメリカ研究所での様々な仕事、コミュニティ・カレッジでの講座、そして演習での卒業論文指導の始まりなどであった。日本語があまり上手ではない私にとって結構大変な仕事の連続であった。

2012年に2度目のサバティカルをいただき、再び研究者としてチャレンジするチャンスだと思った。ラテンアメリカ研究コース以外にヨーロッパ研究コースにも所属している私が選んだのは、スウェーデンのヨーテボリ大学での1ヶ月の研究、クロアチアのザグレブ大学で1ヶ月の日本ポピュラー音楽についての講義、そして再びリスボンでの1ヶ月のファドの研究であった。そしてブラジルで過ごした後、タイでタイ語を学ぶことにもチャレンジした。

大学に戻り、一年後の2014年から私は2年間、学科長を務めた。つたない日本語、管理職が苦手な私には「地獄」の2年間であった。しかしチャレンジ精神をもって、時間の整理をちゃんとできるかどうか、私にとって最高のチャレンジでもあった。自分らしいやり方で、学科長の仕事をちゃんとやり遂げたと思う。様々な苦手な仕事の中で嬉しい出来事が2つあった。2014年の学科創立50周年および2015年から誕生したLAPプログラムである。

学科長の務めを終え、静かに研究者・教員としての仕事だけ行いたかったが、再びイベロアメリカ研究所所長に選出され、さらに2018年からその務めを行いながらグローバル教育センター副センター長に任命された。

LAPプログラムおよびグローバル教育センター副センター長の職務のおかげで、再び様々なチャレンジができた。留学生向け日本ポップカルチャーの集中講座の担当など、英語による講座を含む様々な仕事を行うことにもなった。

そして2018年2月に、学生の評価による、上智大学における教員として最も誇らしい賞 Good Practice をいただいた。それは今まで教員として歩んできた道が認められた証であり、とても嬉しかった。そして、その次の年度に上智大学に働き始めてから25年を迎え、本当に誇らしいことであった。

私はとても適当に人生を過ごす人間だと思う。私は日本語とポルトガル語を含む7ヶ国語でコミュニケーションや読書ができるが、どちらも完璧ではない。私は完璧に言語を使うことを目指したことはない。それよりも、世界のどこに行ってもコミュニケーションを様々な人と取りたいだけである。だからこそ、その7ヶ国語以外にさらなる13ヶ国語も少し勉強し、何となく読書および片言の会話も適当にこなしている。それもチャレンジの一つであるかもしれない。

ここまで上智大学において様々なことができたのは、恵まれた先輩（特に堀坂先生、三田先生と大野先生）、協力的な同僚（特にポルトガル語学科とイスパニア語学科）、協力的な職員の皆様のおかげに違いない。そして指導した学生に恵まれているとも確信している。なぜならトラブルメーカーが存在しても、それも教員としてのチャレンジと捉えることで、教員としてだけでなく人間としても成長できると思うからである。

2020年に再びサバティカルをいただき、チャレンジを続けると思う。私にとっての教員像・研究者像は、勉強や研究の広がりおよびブラッシュアップを続けることだから。